

英語学習者に留学を促す情報と異文化接触

—アメリカの語学学校で学ぶ日本人に関する予備的報告—

竹内 裕子¹⁾

はじめに

本稿は、1999年度京都文教大学海外学術調査奨励金によりエリザベス・キングと筆者が実施した「日本人留学生の異文化体験 —アメリカ合衆国の語学学校に通う学生の事例から—」による予備的報告である。

英語教師として大学における英語教育に長年携わるキングは、日本人の英語を母語とする国での英語学習においてより効果的に言語を習得するために不可欠な語学的・文化的知識と情報があるのかに関心を持ち、筆者は日本人留学生の異文化接触の具体的状況と適応のプロセス、特にアメリカ社会において「外国人」である日本人留学生がどのような経験をしているのかに関心があった。両者の関心事である英語教育、言語習得、異文化接触と適応のプロセスの実態に関する議論は互いに大きく関連があると思われる、アメリカ、日本と出身国、文化的背景も異なる2名の調査者により日本とアメリカという2つの文化圏を考察する有効性も鑑み、今回の調査の実施に至った。

1999年8月から9月にかけて、キングと筆者はアメリカ合衆国において、北西部の都市部に位置する2校、北カリフォルニアの大都市近郊にある1校、そして、南西部にある都市近郊にある2校、計5校の英語学校を訪問し、27名の日本人留学生にインタビューを行なった。それにあわせアンケート調査も実施し、北西部に位置する7学校、北カリフォルニア州に位置する3校、南西部1校の計11校からの協力を得た。男性41名(28.9%)、女性101名(71.1%)の合計142名分の回答が得られ、年齢層は、15歳から43歳である。インタビューとアンケートでは、留学を実現させ

た学生の日本における英語教育の経験や海外旅行、ホームステイなど海外との接触の経験、今回の語学留学の目的、実現までの経緯、そして渡米後、英語を学ぶ上での問題点、日常生活における異文化との接触の具体的状況と、生活上の問題点などについて聞いた。

近年、国際化、異文化理解、異文化コミュニケーション等の言葉で他の文化・生活との接触がもたらす問題点が取り上げられるようになり、英語学習、異文化接触に関しての研究も多い。小林は異文化間教育と国際理解を取り上げ、単なる知識では不十分で、現実の接触が実際にあるということを述べた上で、「経験」から得る理解に期待をしている(小林1988:13-14)。しかし、実際にどのような日本人がどのような過程を経て留学し、どのような生活を送り、どのような異文化接触の機会があるのかを具体的に論じる研究は少ないように思われ、個々の留学生の異なった経験の分析により、日本人の英語学習の実態、留学生活の実態を明らかにできると思われる。

第1節では、アメリカでの語学留学を促す諸要因として日本人海外旅行者数、海外在留日本人数、長期滞在者数の変化とその旅行先、滞在先について述べ、今回の調査で扱う語学学校が一般の留学案内雑誌において「留学先」としてどのように位置づけられ、特徴づけられているのかをみる。そして、第2節では日本における英語学習の現状と海外との接触を取り上げ、語学留学を実現させた学生の日本での英語学習の状況、海外旅行・ホームステイなどによる海外での異文化の経験について述べる。第3節では、アメリカ合衆国、英語を母語とする国での語学学習と生活を異文化との接触の点からみていく。

1) 京都文教大学人間学部文化人類学科・助手

1. アメリカへの語学留学を促す諸要因

海外への旅行、留学を経験している日本人は、今では珍しくはない。しかしながら、このような現象もここ十数年にみられる変化である。日本の経済発展に伴い日本人海外旅行者数、海外の日本人人口も増加を続けた。日本人海外旅行者は、1970年には63,000人であったが、1980年には3,909,000人、1970年と比べ60倍以上となり、1985年には4,948,000人、1980年と比べ5年で百万人が増加、そして、1989年には1千万人を超えた。1997年には16,803,000人が海外へ出かけるまでとなった（表1-1、総理府2000：38）。

そして、海外在留日本人、長期滞在者（3ヶ月以上の滞在者で永住者でない邦人）については海外在留邦人は1970年には289,990人であったが、1980年には445,372人、1990年には620,174人となりその後も増加している。長期滞在者も1970年には63,527人であったが、1975年には137,506人と倍

増し、1980年には193,820人となり、1990年には374,044人、1993年には432,703人と増加を続け、海外在留邦人のうち長期滞在者の占める割合も増加している（表1-2、厚生省人口問題研究所1995：150）。海外との接触の機会も観光旅行だけではなく、仕事や留学など多岐にわたり、1999年度の海外旅行者数（16,357,572人）を観光、業務等、その他でみていくと、82.2%が観光、14.3%が業務等、3.5%がその他であり、その他の内分けは学術研究・留学1.7%、永住0.8%、同居0.6%、外交・公用0.4%である。1992年と比べてみると観光83.5%、業務等12.9%、その他3.6%であり観光以外での旅行者数が増加していることが分かる（表1-3、木本書店・編集部1998：134、総理府2000：40）。ここで挙げた海外旅行者数、長期滞在者のここ20年ほどの継続的な増加が示すように海外旅行、留学は日本人に次第に身近なものとなり、現在に至っている。

表1-1 日本人海外旅行者数

年	人数
1970	663,000
1975	2,466,000
1980	3,909,000
1985	4,948,000
1986	5,516,000
1987	6,829,000
1988	8,427,000
1989	9,663,000
1990	10,997,000
1991	10,634,000
1992	11,791,000
1993	11,934,000
1994	13,579,000
1995	15,298,000
1997	16,803,000
1998	15,805,000
1999	16,358,000

表1-2 海外の日本人人口

年次	海外在留邦人	長期滞在者	在留邦人のうち長期滞在者の占める割合(%)
1970	289,990	63,627	21.9
1975	396,617	137,506	34.6
1980	445,372	193,820	43.5
1985	480,739	237,488	49.4
1986	497,981	251,545	50.5
1987	518,318	270,391	52.1
1988	548,404	302,510	55.2
1989	586,954	340,929	58.1
1990	620,174	374,044	60.3
1991	663,049	412,207	62.2
1992	679,379	425,131	62.6
1993	687,579	432,703	62.9

* 海外在留邦人は長期滞在者と永住者を合計した数字である。

表1-3 区分別海外旅行者の推移

	観光	業務等	その他	合計
1992	9,842,086 (83.5)	1,522,094 (12.9)	426,519 (3.6)	11,790,699 (100.0)
1995	12,685,155 (82.9)	2,120,563 (13.9)	492,407 (3.2)	15,298,125 (100.0)
1997	13,766,879 (81.9)	2,483,767 (14.8)	522,104 (3.3)	16,802,750 (100.0)
1999	13,452,869 (82.2)	2,282,849 (14.3)	569,758 (3.5)	16,357,572 (100.0)

1993年において、アメリカ合衆国に長期滞在する日本人は最も多く162,788人、海外で生活する全邦人数の37.6%を占め(厚生省人口問題研究所1995:149)、海外で日本人が最も多く暮らしている国がアメリカ合衆国である。そして、日本人海外旅行者の旅行先をみても、1998年4,951,065人がアメリカ合衆国を訪れている。2位は韓国であるが人数は1,898,940人であり、アメリカの38%に留まっている。(総務庁統計局2000:28)。アメリカ合衆国は多くの日本人にとって「身近な海外」であるといえることができる。

次に、英語を学ぶための教育機関としての語学学校の位置づけは、『毎日留学年鑑①アメリカ留学』においてはまず、タイプ別に留学を4つに分類する。タイプ1:英語研修機関、タイプ2:4年生大学、タイプ3:短期大学、タイプ4:専門学校である。「タイプ1:英語研修機関」が本稿で扱う語学学校である。そして英語研修機関に関する条件として「高校を卒業していればほぼ誰でも入学可能、すぐ入学できスケジュールも柔軟に組める、すべての留学を成功に導くカギになる」が挙げられている。英語研修機関への留学は、「すべての人に開かれた留学コース」であり、その魅力は、「誰でも入学できる門戸の広さであり、英語が不得意でも大丈夫、早い留学のスタート、2週間短期コースも、特に豊かな国際色(毎日留学年鑑刊行会1999:52)」である。『成功する留学Aアメリカ語学留学』においては、「留学体験が自分を大きくする」として、「身近なアメリカ留学」を強調し、「毎年、留学する日本人の半数近くがアメリカへ向っている。」、「映画や音楽などアメリカの文化が、日本人にとっていちばん身近で影響を受けやすい外国文化」と続ける。さらに、「誰でもできるアメリカ語学留学」とし、「資格や学力は問われない」、「学生はもちろん、社会人でも気軽に学べる」と、語学学校では「幅広い年齢層の人々が、各自の目的に合わせて思い思いにアメリカで勉強している」(「地球の歩き方」編集室1999:10-11)と紹介している。

「誰でも入学できる」、「柔軟にスケジュー

ルが組める」、「資格や学力が問われない」、「英語が苦手でも大丈夫」などといった語学学校の特色が、年齢、学歴、英語力、滞在期間などが様々な多くの日本人に受け入れられ、語学学校への留学を実現させている現状があり、今回の調査におけるアンケート、インタビューからもその層の厚さが分かる。

2. 日本における英語教育と海外との接触

アンケートにおいて中学、高校での英語の授業に対する満足度を聞くと、中学では「少し不満」「不満」「とても不満」と答えたものが、66.2%であり、高校では75.3%であった。その理由の否定的なものに「授業がつまらない」「受験のため」「文法や読解ばかり」「実用的でない」「先生が嫌い」などの回答があった。日本の英語教育において、その取り入れの必要性が取り上げられ実施されている「コミュニケーション能力」のための授業に関する問い、「英語の授業で実際に英会話をする時間はどのくらいありましたか。」への回答は、中学では「全くなかった」が63.4%、高校では65.2%と、半分以上がコミュニケーション能力を養うための英会話の授業を経験しておらず、英語の授業を不満と感じる理由に挙げられた、「文法や読解ばかり」「実用的でない」という回答を反映し、「コミュニケーション」を取り入れた授業の不足が回答からも読み取ることができる。

そして現在、中学校・高校において英語を学習する他に日本で英語を学ぶ機会は多く、方法も様々であり、NHKなどのラジオ・テレビ・プログラム、通信教育、英語学校などの手段がある。「今までに、英会話能力アップやトーフルの受験のために英会話学校に通ったことがありますか。」という質問に対し、74名(52.1%)が「はい」と答えている。そして、ジオズ、イーオン、ECC、NOVAなどの大手英語学校に通ったことのある学生は38名(複数回答)であり、その他の者は英語学校、個人指導などで英語を学習している。留学を実現させた学生の多くが、学校教育とは別に、英会話を中心とした学習をしている。

英語を学ぶのと同時に、実際に英語を使用する機会として、英語圏、英語圏以外への旅行がある。今回の留学以前に海外渡航の経験がある者も多く、「外国へは何度いったことがありますか。」という質問に、「今回の留学ではじめて」という回答は12.0%であり、88.0%は以前に海外へ渡航している。実に、93名(65.5%)は2回以上の経験がある(表2-1)。その渡航先は様々であるが、アメリカ、カナダ、英国等の英語圏を訪れた経験を持つ者は80名で、目的は観光旅行と研修・留学等である。渡航形態は、個人、友人、家族でのツアー参加や高校での修学旅行や、大学・短大を卒業するさいの卒業旅行などである。多くの学生は以前に何らかの海外での生活を経験し、そして、今回語学留学の目的で渡米している。

観光旅行とは異なる経験を得ることができるホームステイ経験者も多く、「ホームステイをしたことがありますか。」という質問には、52.8%が「はい」と答え(表2-2)、そのうちの7.7%は今回の留学の初め2ヶ月ほどをホームステイで過ごしている。ホームステイをしながら英語を学ぶプログラムもあり、観光だけでなく、実際の家庭に入る機会も多くなってきており、ホームステイ経験の満足度は高い。74.3%がホームステイ経験を「とても満足」、「満足」、「ほぼ満足」と回答している(表2-3)。

観光、研修、ホームステイなどを経験し再度語学留学をする学生は多く、以前の経験がその後留学しようとする時、どこに留学するかという「学ぶ場」を決定する要因にもなっている。インタビューに応じてくれた学生の数人は、以前に訪れたことのある場所を再度選択している。

カリフォルニア州サンフランシスコ近郊、パークレーに住んでいるAさん(女性・26歳・高校卒)は旅行代理店に勤務した後、今回留学を実現させた。サンフランシスコのどのような観光地に行ったことがあるかという話の中で次のように語っている。

A: その前に、去年も来てるんですよ。サン

フランシスコに1週間。その時に観光地は行ったんですよ。

筆者: 良かったから(今回)来ることにしたんですか?

A: 最初は、友達がいたんですよ。私はサンフランシスコに決めてて、サンフランシスコは、なんて言うかな、サンフランシスコは物価が高いから、ホームステイするなら多分中心にはいられないよ。だったら、あのパークレーの方が良いんじゃないって言って、連れてきてくれたんですよ。結局、パークレーを歩いてみて、不自由しないな、って思って、パークレーにして。

6年前にホームステイした経験のあるBさん(女性・27歳・大学卒)は、前回の経験から今回の留学先を決定した。

B: 6年前1ヶ月、ここでホームステイをして。今回はアメリカを、この町を知っていたか

表2-1 渡航経験

今回がはじめて	12.0
1回	10.6
2回	12.0
2回以上	<u>65.5</u>
	100.0%

表2-2 ホームステイの経験

ある	52.8
なし	<u>47.2</u>
	100.0%

表2-3 ホームステイ満足度

とても満足	36.5
満足	16.2
ほぼ満足	21.6
少し不満	12.2
不満	5.4
とても不満	<u>8.1</u>
	100.0%

ら。今度は慣れた。町、どういう人がいるか、友達、ホストファミリー、6年前から知っていた。

夏休みを利用して8週間の短期プログラムに通っていたCさん（男性・17歳・高校在学中）は次のように話している。

筆者：どうして、サンフランシスコ、この場所、パークレーを選んだんですか？誰か知り合いの人がいたとか。

C：いや、塾の先生が。

筆者：英語の塾？

C：英語だけの塾。先生が、最初どっちか迷ったんですけど、サンフランシスコにするかパークレーにするか。やっぱり、「どっちがいいかねー」って、聞いたたら、「パークレー、パークレー」って。

Aさんは、以前に観光で訪れ、友人のいるサンフランシスコを今回の留学先と決定するが、物価、家賃などより具体的な情報を持つ友人の助言を得て、最終的な滞在場所を決定し、Bさんは大学生の時のホームステイの経験のある場所を再び選択している。既に土地柄、人を知っている同一の場所を選択することでアメリカでの生活へスムーズに移行することができ、精神的にも落ち着いて今回の留学をはじめている。Cさんは、教えてもらうようになって英語ができるようになり信頼する英語の先生のアドバイスで今回の留学先を決定している。このような「身近な他者」の助言や自分の経験が次なる海外との接触、留学先選定を促している。

3. 英語を学ぶ新たな環境

ーアメリカでの語学学習と異文化接触ー

今回調査対象とした日本人留学生は、英語の能力の向上が必要不可欠で語学学校に通う学生である。彼らの「異文化接触」の場所は学校での授業とそれ以外の生活における2箇所で大別可能である。本節では、学校の授業において「ネイティブ・スピーカーから学ぶ」、「日本

人以外の学生とともに学ぶ」さいの「異文化接触」と、授業以外での「異文化接触」をとりあげる。

(1) 英語学校の授業のなかでの異文化接触

ネイティブ・スピーカーによる英語指導は日本の中学・高校でもEATの導入などにより実施されているが、すべての学生が経験している訳ではない。中学・高校でのネイティブ・スピーカーによる授業の有無を尋ねたところ、中学校では51.8%、高校では43.6%が「ある」と答えている。しかし、その頻度は低く、「週1回にも満たない」という回答が中学校で68.9%、高校で45.2%である。多くの日本人学生にとって、アメリカでネイティブ・スピーカーから学ぶことも彼らにとっては新しい経験である。次に、調査中に訪問した3校の英語学校において日本人以外の留学生の出身国を聞いたところ、ドイツ、フランス、スイスなどヨーロッパからの学生が多く、中国、台湾、韓国からのアジア人学生も多く在籍していることがわかった。

アメリカで英語を学ぶことが日本人学生にどのように受け取られているのかを知るために授業時の問題点として、「日本人でない学生の態度」に関して聞いたところ、19.3%の学生が「問題だ」「少し問題だ」と答えている。4分の1は他国出身の学生の存在を「問題」と捉えていることになる。インタビューにおいて、学生たちは彼らにとって何が問題なのかを語っている。前述のBさんは、次のように言う。

B：日本人、アジア人の子より、ヨーロッパの子の方がよく喋る。喋り終わるまで待たなくてはいけない。話し終わるまで。

筆者：どう対応しましたか？

B：初めはもう、「えー」って、でも私もなんかいいたい。…でも、初めころは言えない。6年前に来た、その時は流された。今はそれなりに。6年前は学生だったけど、それから会社にも勤めたし。自信を持っていられるようになりましたね。

Aさんは、アジア人とそれ以外の国出身の学生（とくにヨーロッパ）との関係を語りながら、授業の様子を語ってくれた。

筆者：クラスだといろんな国から来てる人がいるじゃない。アメリカにいるんだけど、違う国からの人が多いから。

A：どこにいるかわかんなくなる。

筆者：大変でした？そういう人たちと一緒に授業受けたりするのって。

A：アジア同士が一緒にいる方が楽、ですよ。クラスに今は台湾人が3、4人いる。で、何か通じない時でも、漢字で通じるんですよ。授業してても。電子手帳とか辞書ありますよね。あれで、見て理解できるんですよ。分かんない単語が。

(中略)

筆者：ヨーロッパの人とか。よく喋るでしょ、みんな。

A：一番苦手なのが、イタリア人。よく喋るって言うのと、聞き取りにくい、って言うのが一番。一番私はイタリア人が喋っている英語が聞き取りにくい。

筆者：授業中、カンパセッションする時は大変ですか？チーム作ったりとか。日本人の子ってあんまり喋らないじゃない。先生とかも困ってません？

A：なるべくヨーロッパとアジアを組ませるんですよ。

筆者：先生達が？

A：でも、クラスによっては、今週からかな、今のクラス全員アジアなんですよ。1クラス。で、日本人と。日本人が5人くらい。で、台湾2人と、韓国1人。全員アジアなんです。でも、そのほうが逆にやりやすくなった。会話のレベルはたぶん下がっていると思うんです、ヨーロッパ人が入ってる時より。差があんまりないっていう点では、みんな平等に喋れる、っていうのはすごくやりやすい。

筆者：ヨーロッパの人いると、自分は喋れてないなって気がします？チャンスが少なくなる

とか。

A：全員アジアだと平等。そんなに差がない、同じレベル、でも差がない。

筆者：その差って言うのは、喋る量のこと？

A：喋る量。あと、ボキャブラリーの知ってる量。そういうのでは同じクラスでも差がありすぎる。上になればなるほど差が開くから。一番上の人と下の人でも、差がある。

筆者：じゃあ、なんとなくアジアの子達と皆と一緒に授業受けてたほうがいいですか？

A：いごごちはいいですね。で、喋る量も増える。みんな同じように平均して、喋れるんです。

筆者：もしヨーロッパ人の子と授業受けてると、「あっ、喋りたいのに。」と思っても喋れない所が多いですか。

A：うーん、ありますね。あと、最初からもう、日本人は引いちゃうじゃないですか。もう、それは習慣っていうか、なかなか大変ですよ。

このように、日本人留学生にとってネイティブ・スピーカーから日本人以外の学生と共に英語を学ぶことは大きな「異文化接触」の機会である。英語を学ぶという状況においても、異なった文化的背景を持ち、異なった態度、発言のスタイル等を持つ他文化圏の学生との学習の機会には日本における英語教育の環境とは異なる。彼らは、授業中の発言の量、発言スタイルの違いを取り上げ、ヨーロッパ出身の学生と日本人学生との相違を強調し、同時にアジア系学生との間に親しさを感じている。その違いは、「異文化を持つ者」との英語学習により、自分に必要なスキルを獲得させる良い機会ともなっている。

(2) 英語学校以外での異文化接触

日本人留学生がどのような場所で居住し、どのような人々と出会っているのかを知るために、「どこに、誰と住んでいるのか」について質問したところ、87.8%がルームメイト、その他の人々と暮らしており、1人暮らしの者は17名

(12.0%)であった(表3-1)。彼らの居住場所はホームステイが一番多く、37.3%、ついでアパート28.2%、寮19.0%、間借り11.3%となっている(表3-2)。多くの学生は2人以上で生活している。ホームステイをしている学生は、アメリカ人家族と生活していることになるが、アパートや寮においては、実に多様な国籍の人々と暮らし、同居する人々の国籍は142名のうち、日本人のみと生活しているのは19名(13.38%)であり、アメリカ人のみと住んでいるのは56名(40.1%)である。その他の47.52%、半数弱の日本人学生は、フィリピン、タイ、中国、台湾、韓国、ベトナム、インド、ペルー、ブラジルなどからの出身者と生活している。

日本人留学生は学校以外の生活の場所でも異文化と触れ合う機会を持ち、それはアメリカ社会、アメリカ文化に加え、他文化との接触である。そして、様々な国の出身者との関係をも築いている。大手広告代理店を1年休職して留学していたDさん(男性・33歳・大学卒)は、ルームメイトやその友達を付き合うなかでの発見を語ってくれた。

表3-1 居住形態

一人	12.0
ルームメイト	35.9
その他	50.7
無回答	1.4
	100.0%

表3-2 居住場所

アパート	28.2
寮	19.0
間借り	11.3
ホームステイ	37.3
その他	1.4
	100.0%

C:あの、日本人は日本にいと、アメリカやヨーロッパのことは、まあ、たくさん情報も入って来ますし、まあ、理解したい、知りたいということもあって知っていますけど。アラブの人たちの習慣とか、宗教について、イスラムについてはほとんど知識を持っていない。ただ、こっちで一緒にいるということは彼らの宗教をちゃんと理解していないと。例えば一緒にお酒を飲みに行くことができない、何が食べれない、食べちゃいけないということを理解していないといけなし、という点では、全然知識不足、もちろん歴史的背景も知りませんし。

新たな場所での生活が、出身国、文化が異なる様々な人と出会うことにより、「異文化」を持つ者とどのように接するのか、文化の違いを知り、それを理解する必要性と価値に気づき、その上でどのように接するのかを考える機会となっている。文化的背景の違いがもたらす、差異への対処と対処のための知識の必要性を認識している。

アメリカ合衆国における英語学習と生活の中で留学生は、英語学習を通しての異文化接触とそれ以外の場所での異文化接触を経験している。異文化を持つ者との学習により、自分に必要な英語のスキルを獲得すると共に、異なった態度、発言のスタイルを持つ他者、自らの文化に近い文化を持つ者の存在を発見している。そして、居住空間をはじめとする日常の生活のなかでの人間関係の構築の過程で異文化を持つ他者と接触し、「文化の違い」の存在を知り、それを知ることが不可欠であることを経験するのである。

おわりに

「すべての人に開かれた留学」である語学留学を実現させた学生たちへのアンケート、インタビューにより、幅広い年齢層、異なった目的、さまざまな経験を持った人々に出会った。アメリカ西南部の州の小さな町の語学学校においても、数十人の日本人学生が語学留学してい

ることは、筆者を驚かせました。

本稿では、海外在留日本人数、長期滞在者数の増加や、海外旅行や留学する日本人の増加をみながら、この傾向がさらなる旅行者、留学者を生み出し「誰でもできる語学留学」はより多くの日本人に留学の機会を促すものであることについて述べた。

日本における英語学習の機会は多く、さまざまな方法で英語を学習することができる。海外旅行、ホームステイなどで実際に英語を使用することとともに異文化との接触の機会も増加している。今回の調査において多くの学生が1回以上の海外旅行等の経験をし、その経験、そして「身近な他人」の助言や経験が次なる留学等を促す要因の1つにもなっていることが分かった。

そして、渡米後、アメリカでの英語学習は日本人留学生にとって新たな環境での学習であり、「英語をネイティブ・スピーカーから日本人以外の学生と学ぶ」ことは英語を学ぶなか、さらに国籍も様々な人々と同居し、ルームメイト、その友達などとの異文化との接触を経験している。異なる文化的背景を持つ者との接触により、その違いを目の当たりにし、違いがあることを知り、いかにその差異に対処するのかを考えはじめの機会となっている。彼らは、異文化接触による戸惑い、不安も経験しているが、アンケートにおいて「アメリカでの生活はどうか。」と聞いたところ、「とても満足」「満足」「ほぼ満足」と答えた者は82.3%であり(表4)、アメリカでの生活で様々な問題と直面しながらも充実した留学生活を送っているという結果を得た。

本稿においてはいくつかのアンケート項目の結果を挙げることにとどめ、更なる分析はあと

にゆずることとするが、語学学校への留学だけでなく、大学や大学院などの教育機関への留学を目指す日本人は多い。より広く、より深い異文化との接触により、新しい経験を得ることが望ましいと思われる。

表4 満足度

とても満足	17.6
満足	28.9
ほぼ満足	35.2
少し不満	14.8
不満	1.4
とても不満	1.4
無回答	0.7
	100.0%

文献

木本書店・編集部

1998.『白書の白書(98年版)』木本書店

厚生省人口問題研究所

1995.『1995人口の動向 日本と世界』厚生統計協会

小林哲也

1988.「異文化間教育と国際理解」『異文化間教育2』第2号, pp.4-14.

総務庁統計局

2000.『日本の統計2000年度版』大蔵省印刷局、日本統計協会

総理府

2000.『観光白書(平成12年度版)』大蔵省印刷局「地球の歩き方」編集室

1999.『成功する留学 Aアメリカ語学留学(1999~2000)』ダイヤモンド・ビク社

毎日留学年鑑刊行会

1999.『毎日留学年鑑①アメリカ編』

(付記) 本稿は1999年度京都文教大学人間学部海外学術調査奨励金による研究成果の1部である。

Japanese Students in U.S. Language Institutions:
Motivation and Cultural Adjustment
A Preliminary Report

Yuko Takeuchi

This is the preliminary report of a study of selected Japanese students at English language institutes in the United States conducted by Yuko Takeuchi and Elizabeth King. In this project we held interviews and administered questionnaires regarding academic and cross-cultural experiences to Japanese students studying English in university-related language institutions.

The recent trend among Japanese toward going abroad prompts many students to study English in countries where English is spoken. The students we encountered represent a wide variety of age groups, academic experiences, and English ability, and the length of study also varies greatly.

These experiences give the Japanese students contact in the classroom with students from various cultures, and offer them chances to realize and find their individual ways to adapt to these cultural differences on their own in their daily life.